

特集

「気になる」を
どう見つける？
どうつなげる？



体験から 学ぶ

行事、部活動、探究、そして日々の授業。

高校は体験に満ちています。

生徒一人ひとりが、日常的な体験を通して
新たな発見をしたり、主体的に学びに向かえるようにと、

さまざまな教育活動のなかで

工夫をこらしている先生も多いと思います。

「体験から学ぶ」とはということなのか、
どうしたらより学びを深められるのでしょうか。



Report

ただ歩いて、写真を撮って、絵に描くだけなのに
今まで素通りしていた「知の種」が見えてくる

「いつもの学校」で 感性の扉は開く



ワークショップ企画・実施
いちかわ ちから
市川 力さん

一般社団法人みつかる+わかる代表理事。慶應義塾大学SFC研究所上席所員。元東京コミュニティスクール校長。大人と子どもが一緒になって探究する学びを研究・実践。多様な人が好奇心を発揮して共に成長する場をつくるジェネレーターとして活躍。

気づきの感度を上げ、知の種を集める 「Feel度Walk」ワークショップ

今夏、小誌編集部は体験から学ぶためのヒントを求め、『探究する力』の著者である市川力さんに「Feel度Walk」を実施してもらいました。参加したのは埼玉県立小川高校の生徒たち11名と先生方です。「Feel度Walk」とは、あてもなく歩き、なんとなく気になるものを記録してスケッチすること。偶発的な出会いを通じて、感じ取る力（感度）を上げる狙いがあります。不安そうな生徒たちを前に、市川さんは「今日は学校の周りを歩くよ。毎日見ている景色に、特別なものなんてないと思う？ 子どものころなら、気になるものを見つけて、あちこち立ち止まっていたんじゃないかな。今日は子どものように歩いてみよう」と話し始めました。

取材・文／塚田智恵美 撮影／竹内弘真
協力／小川高校（埼玉・県立）



校舎の周りを歩き、 「なんとなく」気になるものを 写真に撮る

「映え・ググる」は禁止
自分の感度に素直になって

「これから40分間、少人数のグループにわかれて歩きます」。市川さんがそう話すと、生徒たちは少し面倒そうな表情をした。遠出をと思った生徒から「長い距離を歩くのは疲れそう…」と声があがるが、今回歩くのは高校の敷地内だけだ。3～4人で1組をつくり、あてもなく歩く。「歩くという漢字は『少』し『止』まると書きます。少し止まってみることで、観察の感度が上がるんです。なんとなく気になるものを見つけたら、とりあえず写真を撮ってね。SNSで映えない、写真を撮ろう」(市川さん)。行うのはそれだけだという。「大事なのは、みんなの中に



さあ、歩こう!

何を撮ればいいの?
なんとなくと言われてもわからない……

戸惑う生徒たち。
「自分が気になるもの」が、
わからない。



なかなか足が動かず
スタート地点の周りをウロウロ

ある『なんとなくセンサー』が働く瞬間。
あれ？ おや？ と感じるもの」(市川さん)。スマホで情報を検索するのも禁止。目的地はなく、進む方向もグループごとに自由だ。生徒たちはキョトンとした表情だったが、市川さんに促されて歩き始める。

とりあえず、
目の前にあるものを
撮ってみるか。



市川さんからの
質問攻めに
困惑する生徒たち。

あれ何だろう？
知ってる？

何が
すごいん
だろう。

次第に、漂うように自ら歩き始める。
「とりあえず」写真を撮る。



同じものを撮って
お互い見せ合ったり
何を撮ったかシェアしたり
し始めた。

え？ そんなの
どこにあった？



「これすごいな！」と
自分の発見に夢中な
市川さん。

ぽっーん



カメラを
ズームにしながら
気になる部分を
パシャリ。



ふらり、ふらりと
それぞれ気になる方向に
歩いていく。

よしよし、
もう声はかけず見守ろう。



普段
注目してない
ところが
目が行く。



雨だれの染みが気になる？

\ STEP /

2

撮った写真のなかから 1枚選んで、 見たままスケッチする

葉の尖り方、建造物の濃淡
絵を描くことで発見する

歩くのを終えて戻ってきた生徒たちに、市川さんは「今、撮ってきた写真から1枚、気になるものを選んでスケッチしてみて」と声をかける。グループで模造紙を使い、それぞれ座る方向から描きこんでいく。なかなか写真を1枚に絞れない生徒には「所詮“なんとなく”撮ったものだから。なんとなく選ぶ練習だと思って」と市川さんが助言。

生徒たちはペンを持つと、黙々と描き始めた。歩く間は不安そうな様子だった生徒も、絵を描き始めると表情が変わる。時にはスマホの中の写真を指で拡大しながら、改めて自分が撮ったものを観察している生徒もいた。色の濃淡を表そうとする生徒や、植物の葉の感触、葉脈の構造を表現しようとする生徒。集中して、細



かな部分の表現を試行錯誤している。早々に描き終えた先生方は、生徒たちを見回りながら「こんなの、どこにあったの?」「私よりも上手」などと声をかける。スケッチという行為を通じて、描く対象を深く観察し、発見したことを絵で表現しようとする生徒たちに、先生方は驚いた様子。先生に褒められた生徒たちは、誇らしそうな表情を浮かべた。そして終了時間までペンを置くことなく、熱心にスケッチを続けていた。



「すごいね!こんな細かなところに
気がいたんだ!」
見回る先生も驚き、声をかける。

馬輪場の木の
「この木だけなんだか洋風?」



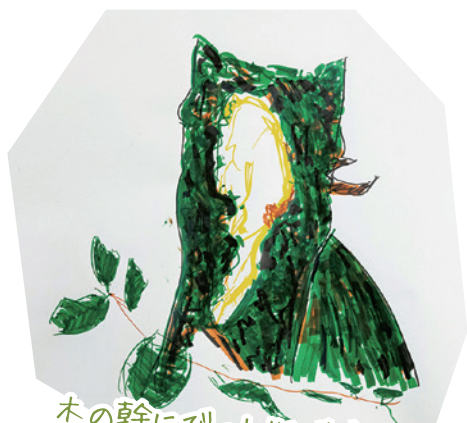
石の中に描かれた絵の
「これは何? 何のための絵?」



側溝に落ちている
アイスのパッケージ。

細部にこだわり、絵を描く生徒たち。

自分が見たものを、
見たまま表現する。



木の幹にびっしりと生えた苔の
木の上の別の生物、のふしぎ。

「誰のもの? なぜここに?」
棚に置かれたメダル。



ロッカーの鍵びの
まだらの模様。

\ STEP / 3

何を描いたのか、 どこが気になったのか、 発表する

「こんなに話せたんだ」 先生たちが驚いた理由

「これは何？ どこにあった？ 見つけた瞬間や、描いている間に気づいたことをみんなにも教えて!」(市川さん)。模造紙を広げて、1人1

分程度で発表をする。「校舎の脇に、ひどく錆びているロッカーがあった」と、ある生徒が発表する。「錆びの様子がよく描けているなあ! スケッチを描いていて発見したことはある?」(市川さん)。「うんと、最近置かれたロッカーにはこんな錆びはなかったので、年月が経つことで、こ



のようにまだ模様で錆びていくのが面白いと思った」(生徒)。それぞれの発見を話す生徒たちに、先生方は驚きの表情。聞くと、日頃は「あなたは何に興味がある?」と聞いてもなかなか自分のことを語らない生徒が、このときは堂々と語っていたという。

「最初は戸惑っていたのに、こんなにすごいスケッチが描けた。なんとなくではなく『しっかり』観察して“ちゃんと”発見してください』と言われていたら、この絵が描けていたかな。無駄で無用、自分とは無関係に感じるモノやコト。そんな『雑』をたくさん集めて記録する。その積み重ねで“勝手に気づく”ようになっていくんだよ。この



あと外に出たら、今まで目に入らなかったものが見えてくるはず」(市川さん)。探究の旅路はわらしべ長者のようなもの。今掴んだのは最初の「わら」。ここからどんどん興味を広げていくことを恐れなくて、と生徒たちに語りかけた。

ワークショップから
3週間後
参加者の声

見慣れたはずの通学路が 「まだ知らない、新しい道」に

「Feel度Walk」の体験は、参加者に何か変化をもたらしたのだろうか。3週間が経ち、話を聞くと「日常のなかで、いつもなら素通りしていたところに自然と目が行くようになった」「通学路の景色が変わって見える」といった声が生徒たちからあがった。「1年以上学校に通っているけれど、新しい発見があり、違う道を歩いているみたい」など、登下校中に気づくことが増えたという意見が多数集まった。いつもの道で「水面に映る建物の歪みが気になる」などと些細なことに気づいて、写真を撮った生徒もいる。ワークショップ当日、みんなで発見を共有した時間を振り返り「どれも

私が見たことのないものばかりだった。あのときみんなが違うものを描いたことで、いつもの学校が違うように見えた」と語った生徒もあり、他の生徒の発見が刺激となって、その後の見方が変わった生徒もいたようだ。また、参加した先生からは、お子さんとの散歩の時間が増えたとの声が。「今までは急かしていた散歩も、立ち止まって子どもたちが見るものを一緒に眺めるようになりました。この視点を大事にして、生徒との関わり方や授業のつくり方を考えていきたい」。生徒だけでなく先生方にも、日々の歩き方や見方に変化をもたらしたようだ。



お子さんとの散歩でも、一緒に立ち止まる機会が増えたという先生からの声も。「この視点が大事なのかと勉強になる」

ワークショップ後も、気になるものを撮り続けている生徒。「水面に映る建物の歪みが気になって、思わず撮った」



ただ歩いて、写真を撮って、
絵に描くだけで、
なぜ生徒たちは
「気づいた」のだろう?